

ファイナル ラウンド

FINAR ROUND

ヘッドギア筋肉女ボクサー

結城

カレン



ここはある場所にある地下ボクシングリング。

薄暗くライトがボクシングリングを集中的に照らす。この地下ボクシングリングに、2人のお互い違う性のボクサーが存在した。ボクシンググローブを装着した男と女のボクサー！。

性別の違う男女のボクサーが2人きり、ボクシングの試合が行われているこの地下ボクシングリングで己の体力の限りの殴り合い。室内温度も高めの設定されたこの空間で少しでもパンチを打てば、汗が飛ぶ。パンチを貰えば汗が水しぶきのように飛び散る。

そんな男女のボクシングの試合も最終ラウンド。1ラウンド3分の全3ラウンド、インターバルは1分の限られた時間でお互いの男女のボクサー、狙うは「ノックアウト」。

カン！2ラウンドの3分が終了を知らせるゴングが鳴らされる。短い時間のインターバルが男女のボクサーが各コーナーポストでしばしの休憩。最後のラウンドで「ノックアウト」を狙うべく息を整える。

赤コーナー側の女ボクサーが用意された椅子にドカリと座る。女性にしては筋肉質で相手の男ボクサーも同等の身体、筋肉をしている。どっちが勝つてもおかしくないノーハンドエキザップの戦い。

「ハア……！ハア……！」

大きく開けた口からたくさんの酸素を取り込み息を整える。大きく開けられた口の中はボクシングの疲労とダメージでドロドロの涎が滴り落ちる。

このヘッドギアを被った女ボクサー！普通の女性より太い腕。割れた腹筋を兼ね備え、豊満な膨らみの乳房。彼女の名は……
「結城 カレン」。

「ハア……ハア……。この試合……。私が、貫う……。」



短い時間のインターバルが終わる。椅子から両者男女のボクサーが立ち上がる。疲労とダメージが残っているのが、目視でわかる。

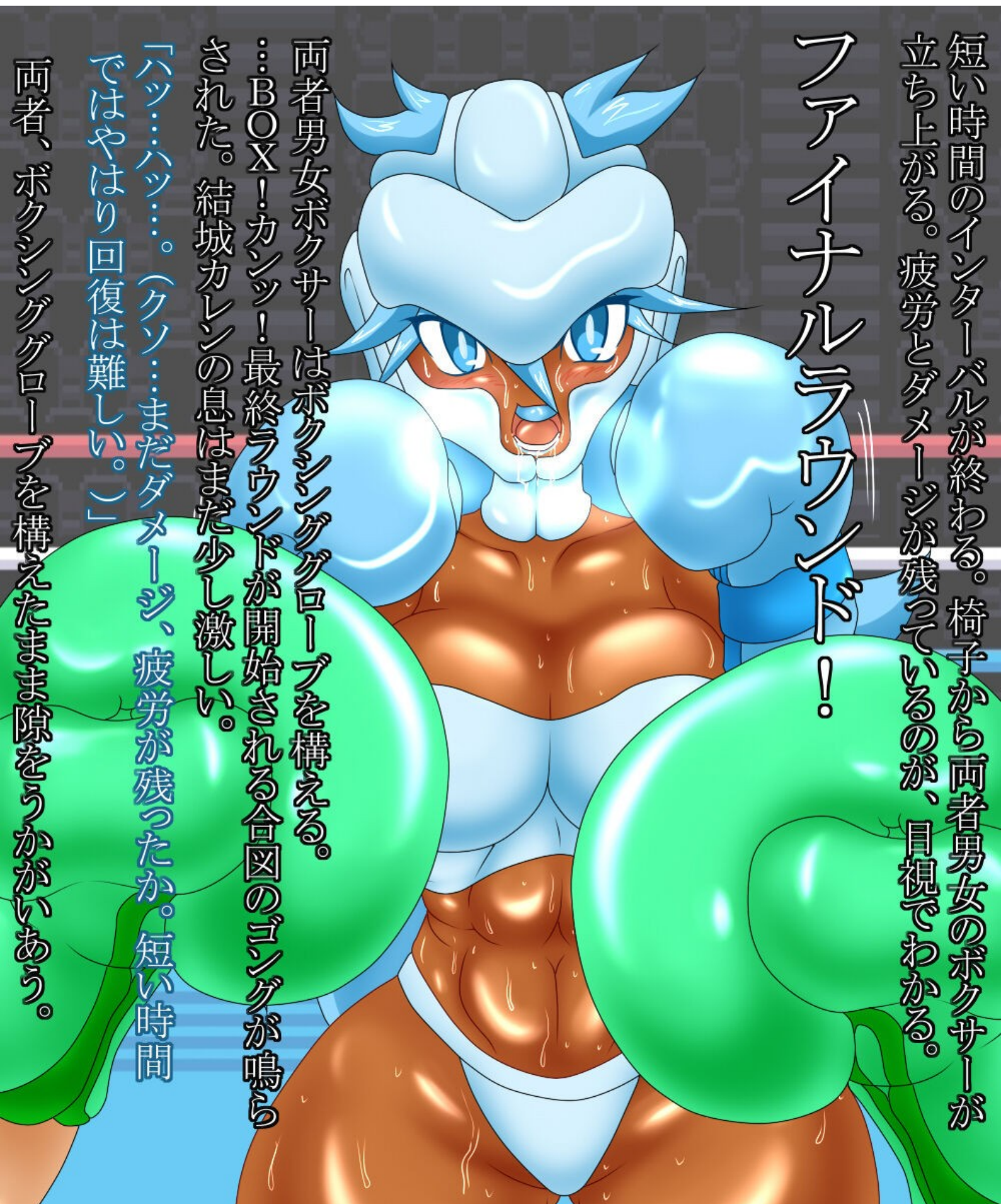
ファイナルラウンド！

両者男女ボクサーはボクシンググローブを構える。

：BOX！カンッ！最終ラウンドが開始される合図のゴングが鳴らされた。結城カレンの息はまだ少し激しい。

「ハッ…ハッ…。（クソ…まだダメージ、疲労が残ったか。短い時間ではやはり回復は難しい。）」

両者、ボクシンググローブを構えたまま隙をうかがいあう。



時間が刻々と過ぎる。そしてファイナルラウンド開始して初動は男ボクサーの右パンチからはじまる。さすがは男ボクサーのパンチ。結城カレンは反応できず頬に男ボクサーのボクシンググローブが張り付く。パンッ!と乾いたパンチの当たる音から結城カレンの顔から汗が飛び散る。

「うぐう! (しまった! このボクサーのパンチに反応できなかった!)」

結城カレンの身体の疲労とダメージが反応力を低下させていた。

「くう……。相変わらず良いパンチだ……」



結城カレンも打たれつばなしと言う訳ではない様子。
少し離れ、男ボクサーの隙を伺う結城カレン。

「はあ……ふう……この男ボクサーも疲労と私のパンチのダメージは
残ってるみたいだ……。反応力も低下しているはずだ……。さあ……
私に隙を見せろ！」

パン!

「ふん!そこだ!」

「うつ!くはっ!」

一瞬、男ボクサーの動きに
鈍さが生じた。その鈍い動
きから男ボクサーのボクシ
ンググローブが下がった。
それは片方のグローブが
5cmの低下。この5cmの
低下を結城カレンは見逃
さない。

結城カレンのパンチが男ボクサーの頬の張り付き、汗が飛び跳ねる。

結城カレンのパンチが男ボクサーにヒットしたが、パンチを打つ行為も疲労感が増す。それが結城カレンの隙を生み出し構えたボクシンググローブのガードが開く。

「！（ガードが開いた！ボディが空いてる！）」

ドズン！

「うっ！うっ！うっ！」

結城カレンのボディに男ボクサーの左パンチが張り付き衝撃を与える。結城カレンのボディに角度のいいパンチが疲労とダメージを増加させ結城カレンの口からマウスピースと涎が吹き出る。

「おふう……！はうう……（くっ！やるな……効いたぞ……）」

男ボクサーからの角度のいいボディへの左パンチ張り付いた結城カレンの
一瞬の悶絶からすぐの行動。結城カレンの反撃は…

ド
ス
ン
ッ
！

「うっ！…ぐはっ！」

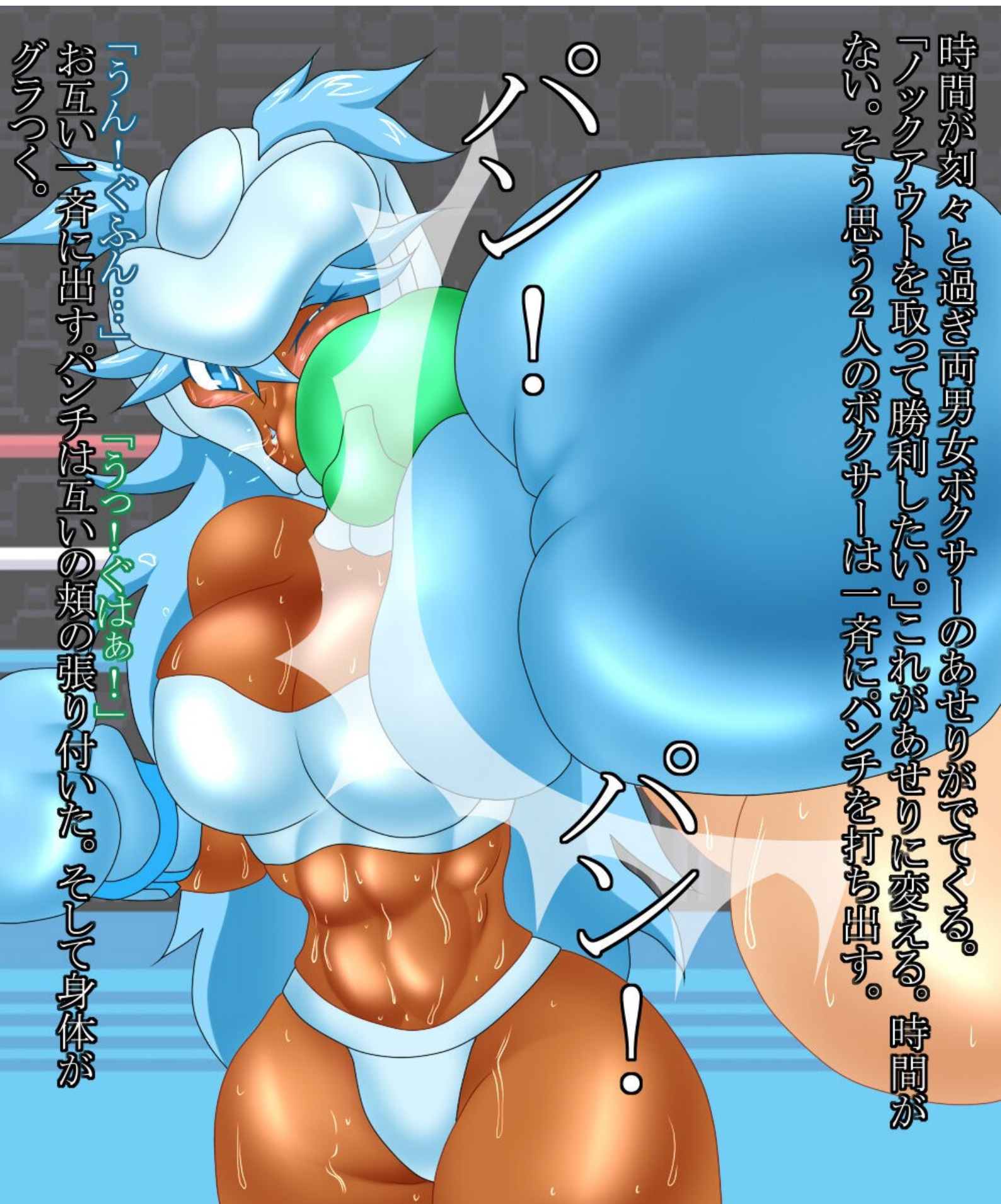
結城カレンも男ボクサーのボディの左パンチを与える。こちらにもまた
角度が鋭角で男ボクサーに与える疲労とダメージは女ボクサーが
与えられるパンチとは思えない衝撃だ。男ボクサーも堪らず顔が
下がる。

「ぐふっ…！（女とは思えないパンチだ！これは効いた…。）」

「はあ…はあ…。効いてるみたいだな…。」

時間が刻々と過ぎ両男女ボクサーのあせりがでてくる。
「フックアウトを取って勝利したい。」これがあせりに変える。時間が
ない。そう思う2人のボクサーは一斉にパンチを打ち出す。

「うん!ぐふん!」
「うっ!ぐはあ!」
お互い一斉に出すパンチは互いの頬の張り付いた。そして身体が
グラつく。



お互いのパンチで疲労とダメージは限界に達している。結城カレン、男ボクサーとともにボクシンググローブのガードが落ち、身体がくの字にガクツと折れ屈み込む。

「うぐう…（くううう！まずい！身体が、おっぱいとボクシンググローブが重い！だがあの男ボクサーも屈んでいる。私のパンチが効いているみたいだ。だが私も効いてしまつてフラフラだ…）」

「ぐっ…ぐふん…！！この女ボクサー…男のプロボクサー並の強さだ。この女ボクサーの重いパンチ…効いた。」

しばしお互い屈み滝のような汗と涎を流しながらも再戦のためにボクシンググローブのガード上げなければならない。だが
そうもいかない。



結城カレン、男ボクサーともにガードが下がり屈み込む。先にパンチを打った方が勝利に近づく。だが身体が言うことを聞かない。両ボクサーの顔と身体が非常に近い。お互いの吐息が感じられる距離。その時、結城カレンから動いた。クリンチ。結城カレンから男ボクサーに抱きつく。

「うつ…はふ…はあ…」

結城カレンとのクリンチ。それは筋肉質なこの身体の女ボクサーなのにも関わらず、女性の独特の濃厚な香り。疲れた女性の汗と涎の香りも魅力さえ感じる。

そして…なんとも言えない豊満な膨らみのおっぱいが男ボクサーの胸板に濃厚に張り付く。柔らかい。汗でヌルヌルだ。

ブレイク！クリンチが解かれ2人の男女のボクサーは一步下がる。
そしてボクシンググローブを構え…BOX。時間は残り1分。焦りが
この2人のボクサーを熱くさせる。

「ふんっ！この女ボクサー、筋肉質でいい体格にも関わらず中々の
柔らかいおっぱいの持ち主のこの女ボクサーには悪いが、
ここでノックアウトだ。」

男ボクサーの大振りの左パンチ。
当たれば立ち上がれない程の
威力が結城カレンを襲う。
だが…。

「ふんっ！舐めるな！そんな大振りのパンチ！さっきのクリンチで
少し回復させてもらったから反応できる！」

結城カレンは身体を下げ大振りのパンチを交わし、男ボクサーは隙を
見せる。そして、結城カレンは右のグローブ下から振りかぶる。



結城カレンの振り上げたボクシンググローブがグニヤリと変形。
男ボクサーの顎にがっちり張り付き、頭が跳ね上がる。

「ううー……ぐはああああ！」

男ボクサーの身体が跳ね上がる。女のアッパーとは思えないパンチの破壊力。この女ボクサーの力いっぱいの振り上げたパンチは男ボクサーに負けないパンチだ。

「はあ！はあ……！どうだ……私のアッパー……」

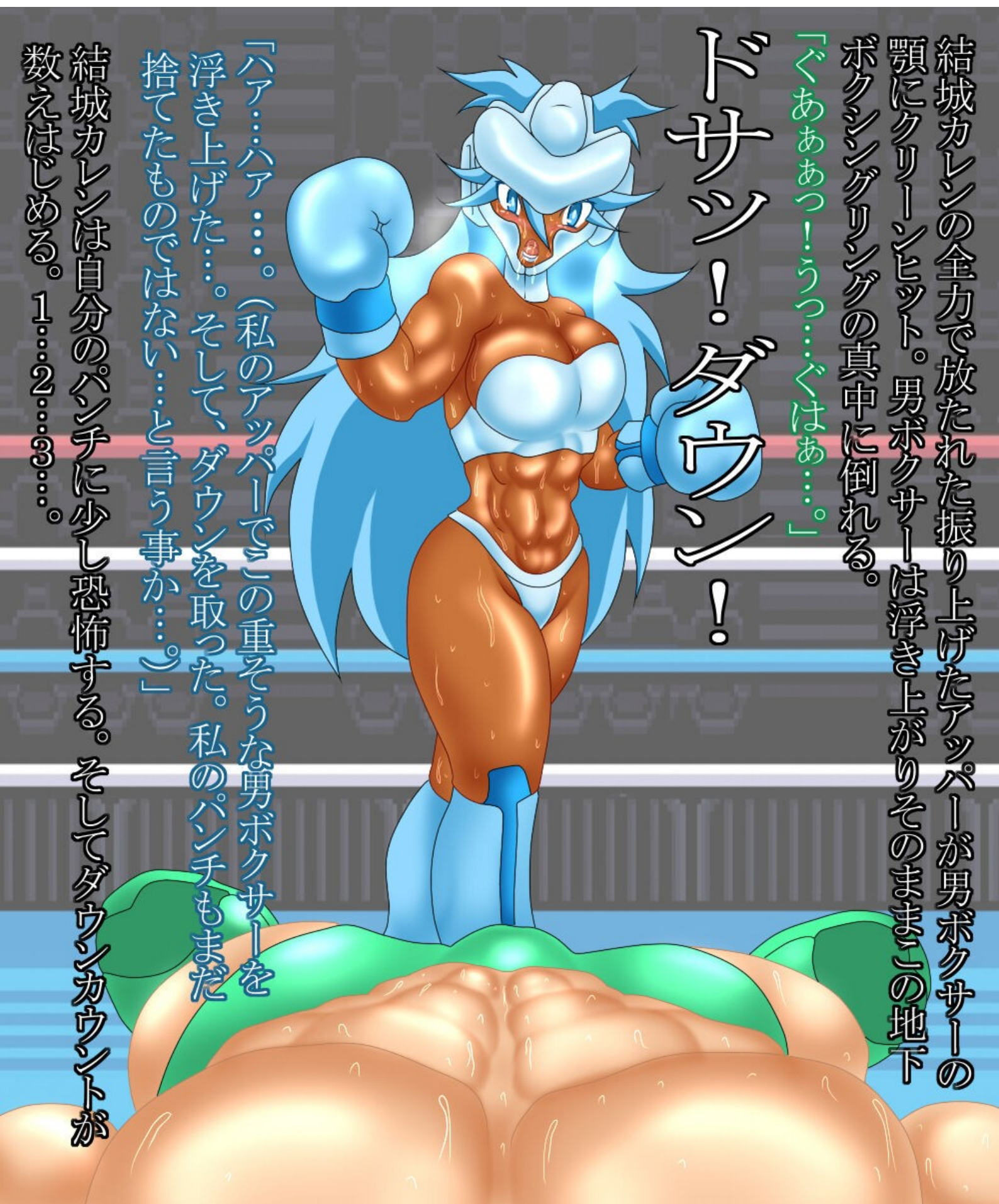
結城カレンの全力で放たれた振り上げたアッパーが男ボクサーの顎にクリーンヒット。男ボクサーは浮き上がりそのままこの地下ボクシングリングの真中に倒れる。

「ぐあああつ！うっ……ぐはあ……」

ドサッ！ダウン！

「ハア…ハア……。私のアッパーでこの重そうな男ボクサーを浮き上げた……。そして、ダウンを取った。私のパンチもまだ捨てたものではない……と言う事か……」

結城カレンは自分のパンチに少し恐怖する。そしてダウンカウントが数えはじめる。1…2…3…



ダウンカウント4...5...6...。刻々と数えられる。

結城カレンは何か落ち着かない。フラフラと細かに歩きまわる。

「はあ...はあ...。うっ...! うんっ...!」

男ボクサーは立ち上がるために少しづつ身体を動かす。だが疲労と結城カレンのアッパーのダメージが残り立ち上がれそうにない。だが、何か悪い気はしなかった。今、視界に入った結城カレンの後ろ姿。そして薄暗いリングで卑猥に汗で輝く褐色の綺麗な丸みのある尻。

視界に入った結城カレンの卑猥に見えてきた事で男ボクサーの下半身の肉棒に反応しだす。その反応を結城カレンは見逃さない。

「...! うん... (この男ボクサー... あの下半身... さつきより大きく膨らんでいる! 私のアッパーで...? 私のこの身体で...?)」

結城カレンの視線は男ボクサーの膨らんだ下半身の肉棒。気になつて仕方ない。結城カレンと言う1人の女としての性なのか...。

男ボクサーのダウン。カウントは…7…8…9…。
もうすぐ結城カレンの勝利。男ボクサーの身体の動きがピタリと
とまった。

… 10！ カンッ！ カンッ！

カ
レ
ン
ッ
！

「ふふつ…。残念だったな。私の勝ちだ！」

結城カレンは高々に右ボクシンググローブを上げた。結城カレンの
テンカウント、K.O.勝利。男ボクサーは疲労とダメージでまだ
ぐったりして立ち上がれそうにない。



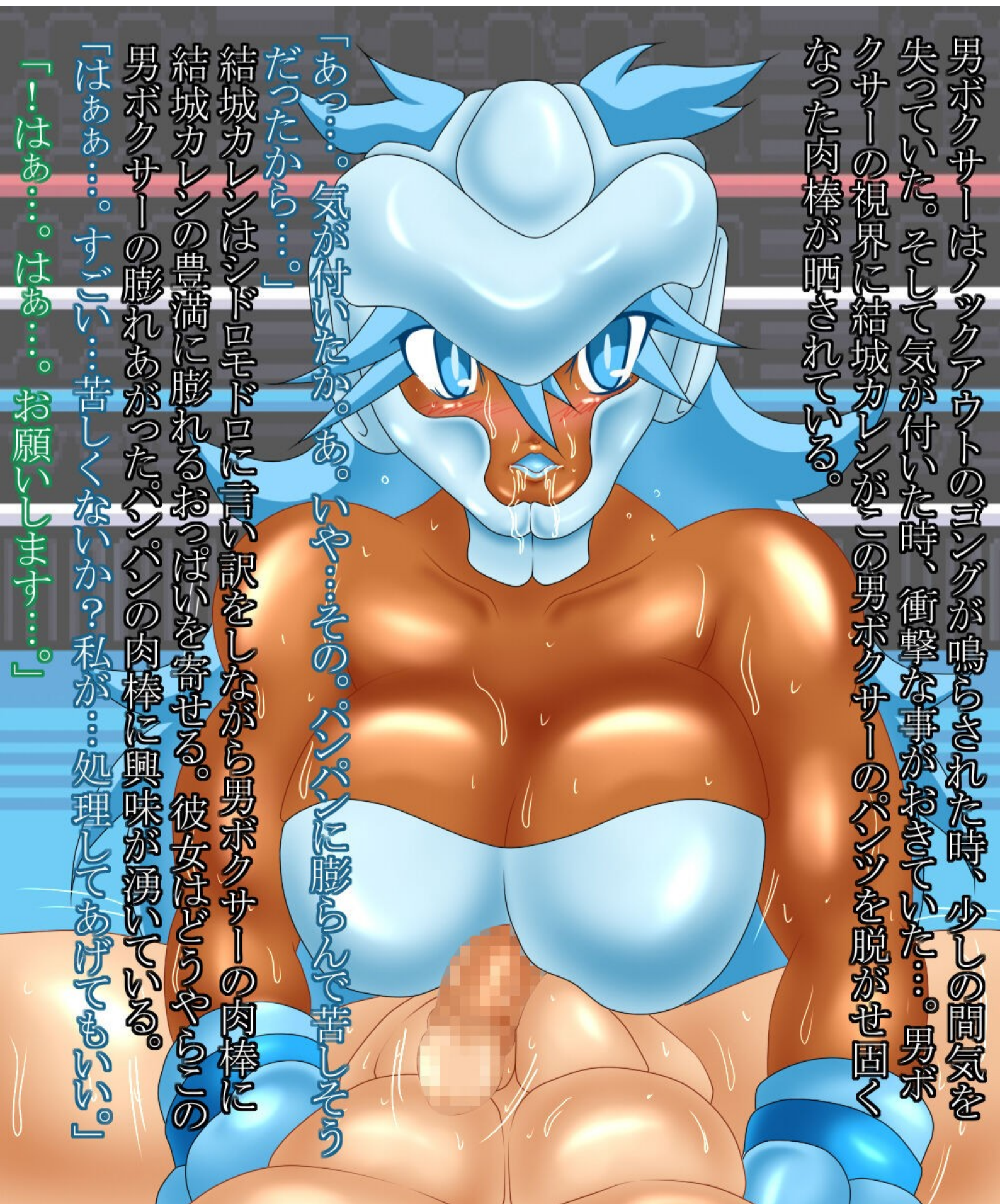
男ボクサーはノックアウトのゴングが鳴らされた時、少しの間気を失っていた。そして気が付いた時、衝撃な事がおきていた…。男ボクサーの視界に結城カレンがこの男ボクサーのパンツを脱がせ固くなった肉棒が晒されている。

「あつ…。気が付いたか。あ。いや…。その。パンパンに膨らんで苦しそうだったから…。」

結城カレンはシンドロモドロに言い訳をしながら男ボクサーの肉棒に結城カレンの豊満に膨れるおっぱいを寄せる。彼女はどうかやらの男ボクサーの膨れあがったパンパンの肉棒に興味を湧いている。

「はああ…。すごい…。苦しくないか？私が…。処理してあげてもいい。」

「！はあ…。はあ…。お願いします…。」



結城カレンは左ボクシンググローブを器用に男ボクサーの肉棒を掴み縦にゆっくり動かす。ボクシンググローブに包まれた肉棒。柔らかい……。今まで味わった事のない感触。さらに結城カレンの右グローブで肉棒の先を優しく擦る。

「うっ！くはっ！」

「あっ！ああ……。あなたの肉棒の先から……。なんだ……。ヌルヌルした液体が……。気持ち……。いいのか？私のグローブこき……。」

「はい……。くっ！気持ちいいです……！」

「ハア……ハア……。本当か……。嬉しい……。」



結城カレンはヘッドギアをかぶっているから表情は読みづらい。だが少し嬉しそうな表情に見えた。結城カレンは男ボクサーの肉棒に顔を近づけ、ヌルヌルの肉棒のにおいを嗅ぐ。

「うはあ……。すごい香り。生々しいにおい……。私は好きだ。」

男ボクサーの肉棒に鼻がつくくらい近づき生々しい香りを堪能する
結城カレン。

「ふはああ……。私の……」

口にくくんでもいいか？

あなたの…を…味わいたい。」

「ハア……ハア……。お願いします。」

結城カレンはニコリと微笑みながら男ボクサーの肉棒に唇が張り付く。

柔らかい唇と同時に柔らかいおっぱいが密着する。そのままヌルヌルつと口の中にふくむ。結城カレンの口内はドロドロでヌルヌルだ。そして顔を縦にゆっくり動かす度に湿った音がこの地下ボクシングのリングの部屋だけに鳴り響いた。

「ちゅぷ……ちゅぽ……クチユクチャ……ああ……ん……ん……」

結城カレンは男ボクサーの肉棒を口に含み舌でなぞるように舐めまわす。そして柔らかい唇で肉棒を擦る。ゆっくり、ゆっくり行為をすることによって肉棒からネットリとした液体が出てくる。結城カレンの口から肉棒が離れ、顔を上げる。結城カレンの舌と肉棒の先にネットリとした液体が糸が引きつないだ。

「うん……うふう。すごい味だ……。これが地下ボクシングの特有の味と言う物なのか？それならば……少し苦味もあったが美味しかった。」
「ハア……!!ハア……!!」

男ボクサーは結城カレンのゆっくりとしたフェラチオの快楽に完全に落ち、息使いが激しくなる。



結城カレンは仰向けにダウンしている男ボクサーの腰を持ち上げ膝に乗せる。

「私…。知っているんだ。あなたが私とボクシングの試合中…。あなたの視線は私のおっぱいに向いていた。ふふ…男の人っておっぱい…好きなんだな。こんな私みたいなのでも…」

「ハア…！ハア…！はい…。君みたいなの…綺麗な丸みのおっぱいは中々お目にかかれないです…」

「…！ありがとうございます…。私、自分のおっぱいを褒められた事がない…。」
結城カレンは男ボクサーの膨れあがったパンパンの肉棒をおっぱいで挟み込む。結城カレンのおっぱいの柔らかい膨らみに包み込まれる肉棒をゆっくり擦りあげる。結城カレンの筋肉質な身体とは思えない柔らかいおっぱいが快楽に誘う。



ネチツ、クチユ、クチャ……。結城カレンのゆつくりと上下に動かされたおっぱいに包み込まれた男ボクサーの肉棒がしつとりとしてきた。

「うう……。うくう……。どう……。？気持ちいい……。？私のおっぱい……。」「ハア……。ハア……。！気持ちいいです……。柔らかいのに……。グハッ……。！なんて乳圧……。」

「うん……。いっぱい……。気持ちよくなつてほしい……。」

その時……。男ボクサーの肉棒がビクッ！ビクッ！と振動しはじめた。

「うっ！うっ……。！ぐふん……。！ハア……。ハア……。！」

「……。えっ！ええ！もしかして……。射精……。？」

「うぐっ……。！はい……。！もうイきます……。」



男ボクサーの肉棒は絶頂に近づいていた。射精が近い。

「ハアッ！ハアッ…！ううっ！もう…。」

「ああ！ああっ！待つて！もう少し我慢して！」

結城カレンはとっさにおっぱいから肉棒を解放する。

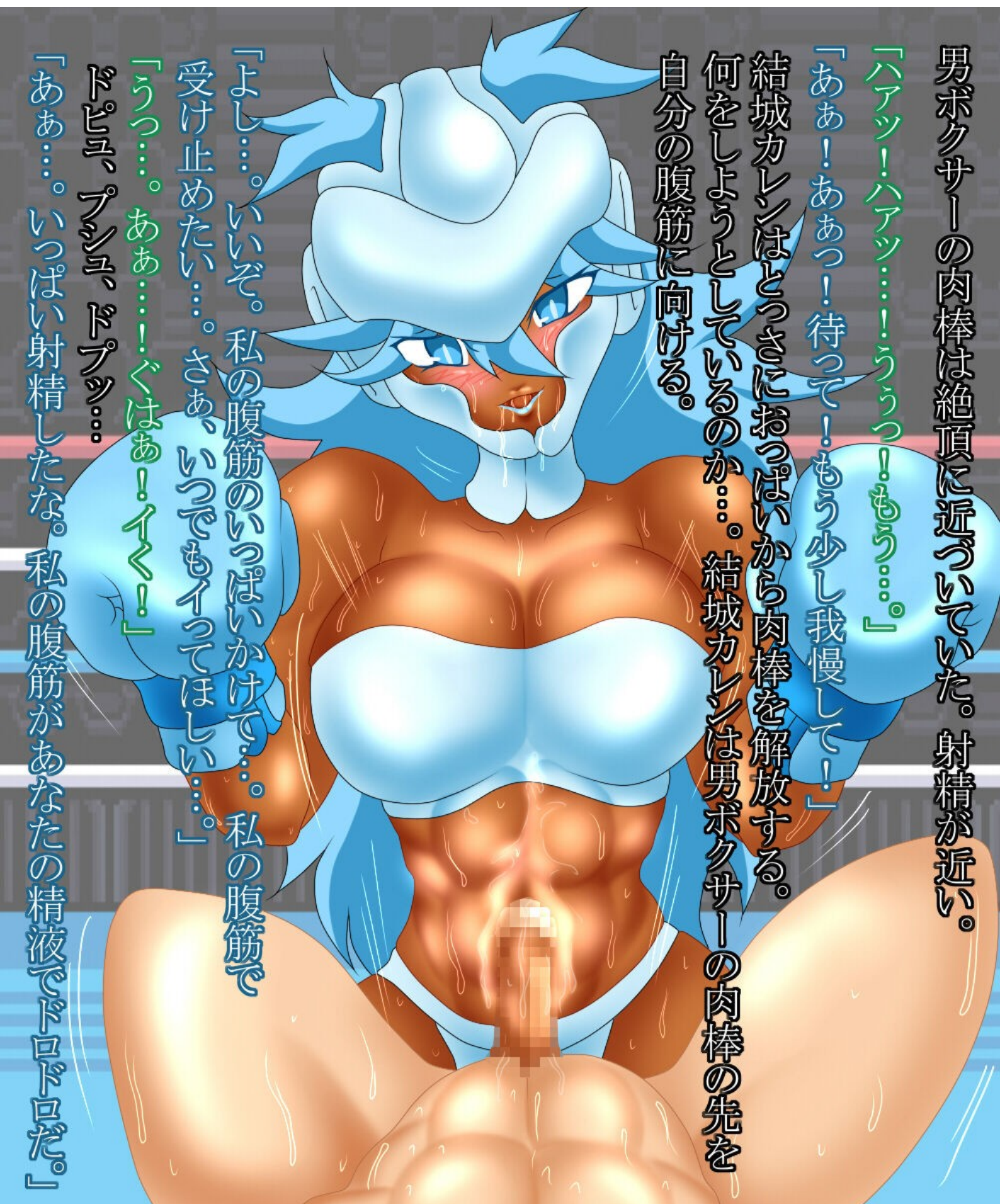
何をしようとしているのか…。結城カレンは男ボクサーの肉棒の先を自分の腹筋に向ける。

「よし…。いいぞ。私の腹筋のいっばいかけて…。私の腹筋で受け止めたい…。さあ、いつでもイってほしい…」

「うっ…。ああ…。ぐはあ！イク！」

ドピュ、プンユ、ドプン…

「ああ…。いっばい射精したな。私の腹筋があなたの精液でドロドロだ。」



男ボクサーの肉棒は結城カレンの豊満なおっぱいのスローな「パイズリ」によつて絶頂に達し、結城カレンの要望で結城カレン自身の腹筋に射精し、腹筋は男ボクサーの精液でドロドロになった。

「ああ…。あつたかい…。あなたの精液で私の腹筋が汚されてしまった…。なんて卑猥なんだ…。私をこんなエッチな気分でこの神聖なるボクシングリングで卑猥な行為をするなんて…。中々、良いものだな。」

結城カレンは射精したばかりの肉棒をまた口に含む。

「あむう…んっ…
ちゅふ…にゅふ…
ん…ん…。ゴクンッ。」

結城カレンは口に含んだ肉棒に残った精液をフエラチオの要領で口内に集め精飲。

「ちゅぽ…。うん…。あなたの残った精液…。おいしかった。
苦味があるんだな。ご馳走様…。」

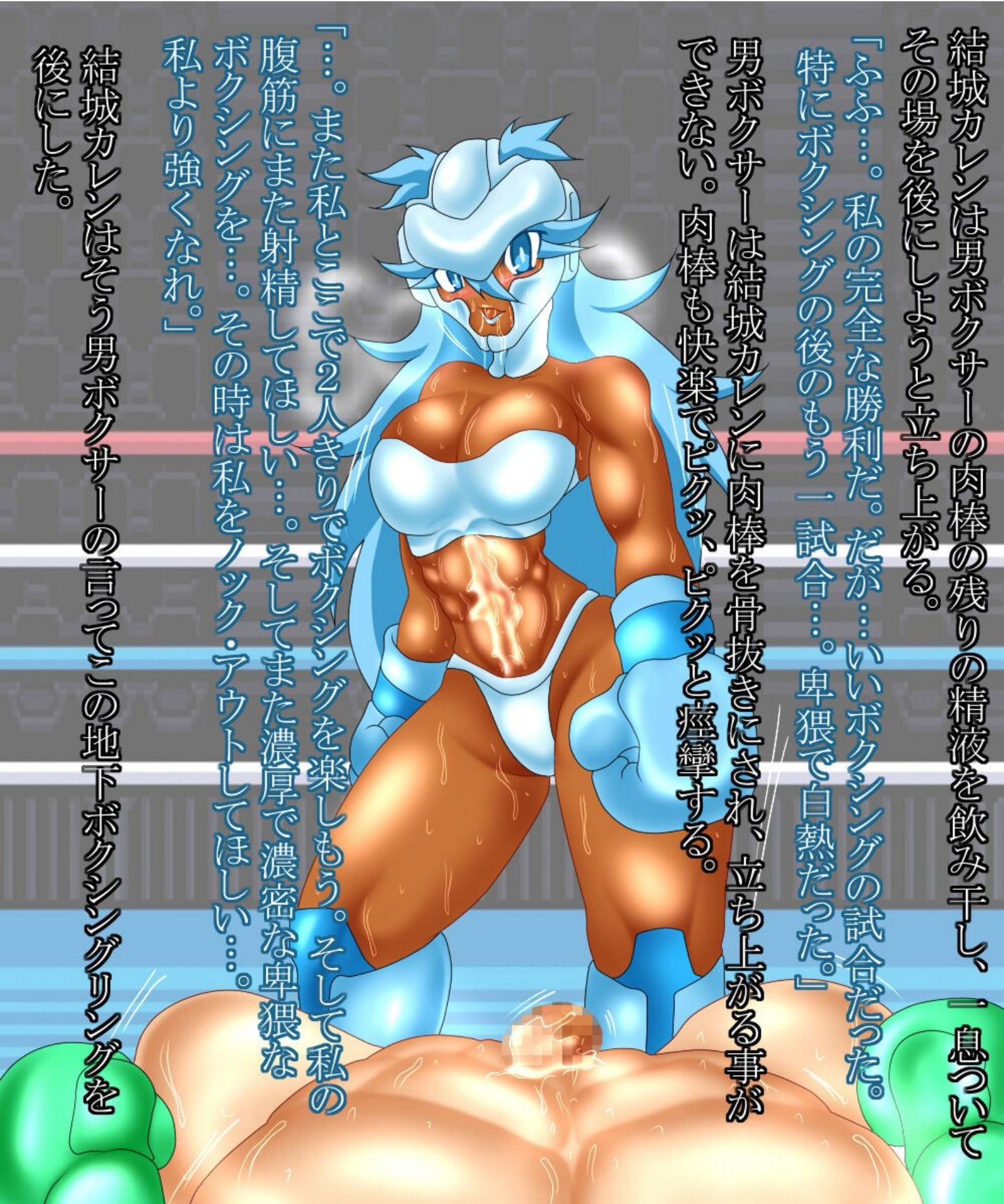
結城カレンは男ボクサーの肉棒の残りの精液を飲み干し、一息ついてその場を後にしようとして立ち上がる。

「ふふ…。私の完全な勝利だ。だが…。いいボクシングの試合だった。特にボクシングの後のもう一試合…。卑猥で白熱だった。」

男ボクサーは結城カレンに肉棒を骨抜きにされ、立ち上がる事ができない。肉棒も快楽でピクツ、ピクツと痙攣する。

「…。また私と…で2人きりでボクシングを楽しもう。そして私の腹筋にまた射精してほしい…。そしてまた濃厚で濃密な卑猥なボクシングを…。その時は私をノックアウトしてほしい…。私より強くなれ。」

結城カレンはそう男ボクサーの言つてこの地下ボクシングリングを後にした。





結城カレン (28)

身長 165cm 体重 62kg

本職 サウナ施設の熱波師

元プロボクサー

好きな物 サウナ スポーツドリンク

ショートケーキ

嫌いな物 ピーマン ゴーヤ

得意パンチ 低姿勢からの

振り上げアッパー

ヘッドギアを愛用している女ボクサー。ヘッドギアを取ると髪が跳ね上がる。筋肉質な身体をしているがこう見えても現役の時より筋肉量は減ったが力強いパンチを打つ。

ホホ〜。グリーンフィールズ
ボウリングクラブに入って、

1週間もたたないで

うちの地下ボウリングで

おわだあと「H」なボウリング

ですか〜。元プロの

ボウサーさんですよね〜。

このクラブの会長の私として

なんとも言えない

事例です。

ちゃんと許可を

とってから「H」

なボウリングを

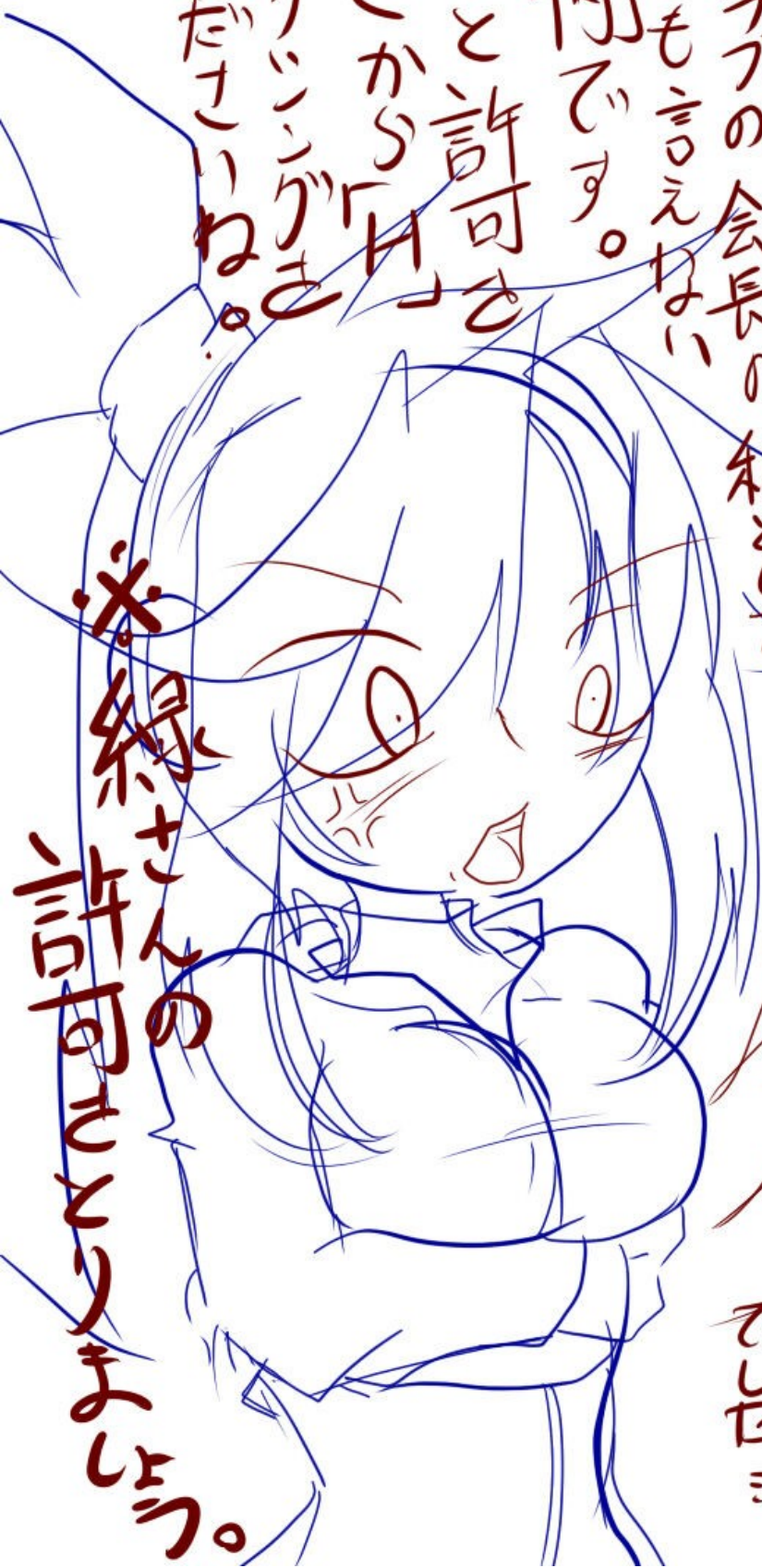
してくださいね。

ハイ〜。

スママセ
でしたミ。

※緑さんの

許可をどうしよう。





見てくれて...

ありがとう。

カレン

